



『平家物語』における六代説話をめぐって

奥田, 静代

(Citation)

国文学研究ノート, 35:1-12

(Issue Date)

2000-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012336>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012336>



『平家物語』における六代説話をめぐって

奥田静代

序

六代説話は平家最後の嫡流である六代を軸に据えた人物伝承である。「それよりしてこそ平家の子孫はながくたえにけれ」（卷十二「六代被斬」という詞章が結びの一文として載せられていることから、「平家物語」における六代の意味は大きいといえる。そこで、本稿では六代をめぐる説話について考察を加える。「平家物語」において六代説話はどうのような構想のもとに形成され、語られてきたのかということに重点を置いて論ずる。その上で、「六代御前物語」も考察の対象として比較することにより、「平家物語」における六代説話の構想を明らかにし、六代説話をめぐる読みの可能性を再検討してみたい。

六代説話に関して岡田氏は「六代御前物語」に最も近い本文を有するのが延慶本「平家物語」であることを論証し、六代説話において母君・乳母・妹が重要な役割を果たしていることを論じている。本稿では、特に六代母子に着目して「平家物語」における小松一族に関する構想を導き出したいので、あえて語り本系に属する高野本を主要テキスト

とする。何故なら、延慶本よりも高野本の方が、六代の母の存在を強調して物語ついていると思われるからである。

この高野本をはじめとして、語り本系の「平家物語」には灌頂巻を特立させる型が多い。ここでは先程挙げた結びの一文で物語が終結するという構成にはなっていないが、六代説話が最終巻の卷十二に集中して展開されているので、六代の「平家物語」における意味は大きいといえよう。

一、六代の位置づけ

壇ノ浦の合戦で平家一門が滅亡した後、「平家物語」卷十二では六代を中心とした一連の説話群が展開される。その梗概は以下の通りである。

平家一門が滅亡した後、鎌倉方の捜索の目を避けるため、六代は母・乳母の女房・妹たちと大覚寺の奥の菫蒲谷でひっそりと暮らしていた。三年が過ぎたある日、六代は密告され、北条四郎時政に捕らえられる。母や乳母の女房の嘆きは並のものではなかった。その折りに、乳母の女房が「高雄の文覚が上臈の子で見目形の

よい子を弟子に求めている」と聞きつけ、六代を助け出すように嘆願する。そこで、文覚は時政を訪れて六代と対面し、六代のいとおしさに心惹かれ、助命することを決意する。時政に二十日の猶予を申し出て、文覚は自ら頼朝のもとへ赴き六代を請い受けたいと懇願する。一方、二十日が過ぎてても時政のもとには文覚からの便りがないので、時政は六代を伴って鎌倉へ下向し、千本松原にて六代を斬ることにした。その時、文覚の使いの者が頼朝からの六代助命の赦状を携えて現れ、辛くも六代は助命される。文覚は頼朝の御教書を取り付けるまでの経緯を自慢げにつらつらと語る。その後、六代は京へ戻ったが、母や乳母の女房はもはやそこにはいなかった。譜代の家臣である齋藤五・六兄弟が「母や乳母の女房は長谷寺にいる」と聞きつけ、長谷寺に向かった。そこで齋藤五が母たちを見つけたし、六代母子は大覚寺にて再会を果たしたのである。

『平家物語』の享受者（聴衆・読者）は巻十二で六代が突如として語り出されるように感じるかもしれないが、物語の作者・編者たちは、既に巻七「維盛都落」で六代を登場させ、維盛の嫡子として描出することによって物語が終始一貫するように構成している。また、巻七の「一門都落」では、平家一門の棟梁となっていた宗盛が、遅参した維盛に「などや心づよふ六代どのをば具し奉り給はぬぞ」と六代の不参を気に留める場面がある。六代が維盛の嫡子として位置づけられているからこそ宗盛が気に留めているので

ある。この他にも、六代を維盛の嫡子として直接的に位置づける要素として、六代が維盛正室の藤原成親の娘を母とするということや、都に残してきた六代に譜代の家臣である齋藤五・六兄弟を付けるという措置が取られたことが挙げられる。更に、巻十「維盛出家」（一〇三頁）に、

抑唐皮といふ鎧、小鳥といふ太刀は平將軍貞盛より当
家につたへて、維盛までは嫡々九代にあひあたる。若
不思議にて世もたちなをらば、六代にたぶべし

という本文がある。ここに挙げられている唐皮は、巻五の「富士川」で平家の嫡流に伝領される鎧として維盛が持参していたと記されているものである。右に挙げた巻十「維盛出家」では、唐皮は単に平家の嫡流に伝えられる鎧であるというよりも、むしろ「当家」つまり、小松家の嫡流に継承されるという認識のもとで語られていると考えられる。何故ならば、この章段には、重盛が「此家を小松といへば、いはうてつくるなり」と言つて、与三兵衛重景に「松王」という童名を授けたという逸話も盛り込まれており、小松家にまつわる話が基底にあると考えられるからである。更に、小鳥は巻三の「無文」において「あはれ是は、家に伝はれる小鳥といふ太刀やらん」とあるように小松家に伝わる太刀としてその銘が挙がっており、『平家物語』は「無文」「維盛出家」を通して、唐皮と小鳥の継承者が小松一族の嫡流であるという構造を形成しているのである。維盛が六代に「小鳥といふ太刀」を与えるというだけは、単に六代が維盛の嫡子であるというだけでなく、小松一族の嫡流で

あるということの意味すると考えられる。従つて、『平家物語』の作者・編者たちは『平家物語』全体の構想として既に六代を小松一族の嫡々として組み込み、位置づけているのである。そこで本稿では、六代を「平家一門」の嫡流としてではなく、「小松一族」の嫡流として論を進めていく。

そもそも、「小松」とは、重盛が邸宅を構えた小松谷の地名にちなんだものである。重盛一族を小松家と認識していたことは『平家物語』にみられる呼称からだけでも、重盛を「小松大臣」「小松の内大臣」「小松の内府」、維盛を「小松三位中将」、そして、有盛を「小松少将殿」とするなど枚挙に暇がない。

次に、平家一門と小松家の関係をみていく。重盛が清盛正室の時子腹でなかつたことは既に周知の通りである。維盛の生母も『尊卑分脈』によると「官女」となっており、重盛正室である藤原成親の妹ではなかつた。次に挙げる系図は『尊卑分脈』からの抜粋である。

重盛———惟盛———妙覚
母右近将監高階基章女———母官女———母権大納言成親卿女

重盛亡き後、小松一族は平家一門から排除されていくので、重盛が時子を生母としなかつたことは小松一族にとって後々まで不利な条件となっているようである。また、重盛の妻は大納言成親の妹であり、嫡子維盛の北の方は大納言成親の娘であるというように、小松家と大納言成親の身

内は近しい関係にあった。これも小松一族が平家一門と距離を置くようになった遠因といえよう。重盛自身はその才覚・人徳により平家一門の棟梁足り得た。ところが、維盛はそうはいかず、棟梁の座は宗盛に移り、維盛は巻十「高野巻」(八八頁)に、

人なみく／＼に都を出て、西国へ落くだりたりしかども、ふるさとにとゞめをきしおさなき者共のこひしさ、いつ忘るべしとも覚えねば、その物思ふけしきのいはぬにしろくや見えけん、大臣殿も二位殿も、「此人は池の大納言のやうに、ふた心あり」など、て、思ひへだてたまひしかば、あるにかいなき我身かなと、いとゞ心もとゞまらで、あくがれ出て、是まではのがれたる也。

とあるように、自ら徐々に平家一門から離れていく。維盛の嫡子であり、且つ、小松一族の嫡流として位置づけられている六代もまた、後述するように鎌倉方によつて排除される宿命にあつた。以上のように、小松一族は消えゆく運命を背負っているかのようである。

次章では、消えゆく宿命を背負つた六代が何故助命されたのかについて『平家物語』を通じて述べる。

二、六代の人物像と観音信仰

『平家物語』における六代の人物像は周圀の人々の目を通して描き出されている。次に挙げるのは文覚からみた六代についてである。

●髪のかゝり、すがた、事がら、誠にあてにうつくしく、此世の人とも見え給はず。こよひうちとけてねたまはぬとおほしくて、すこしおもやせ給へるにつけて、いと心ぐるしうらうたくぞおほえける

卷十二「六代」(六四頁)

●たとひすゑの世にいかなるあた敵になるとも、いかゞ是を失ひ奉るべきと、かなしうおほえければ

卷十二「六代」(六五頁)

●先世の事にや候らん、あまりにいとおしう思ひ奉り候。廿日が命をのべてたべ

また、北条の目に映った六代は、

●昨日むかへ奉て候へども、なのめならずうつくしうおはする間、あまりにいとおしくて、いまだともかうもし奉らで、をきまいらせて候

卷十二「六代」(六三頁)

という様相であつた。以上のように六代はいとおしい若君として造型されている。この六代を乳母の女房は何とか救おうと、高雄にいる文覚を尋ねて行く。女房に六代助命を頼まれた文覚は、まず時政のもとへ行き、そこで六代といとおしさに心惹かれ、時政に二十日間は六代を処刑せずにいるよう約束させる。そして、文覚は鎌倉へ下向し、頼朝に付きまとい、様々に口説いて六代助命の御教書を取り付けるのである。斎藤五・六は六代が菖蒲谷から連れて行かれた時と同様、六代が都から鎌倉へ伴われて行く際にも、

北条、「馬にのれ」といへどもならず。「最後の供で候へば、くるしう候まじ」とて、血の涙をながしつ、

足にまかせてぞ下ける 卷十二「六代」(七三頁)

というように、誠意を尽くして六代に仕えている。

六代が十二才の時に捕縛されたにもかかわらず、処刑されなかつたのは、六代の美しく、健気で殊勝な人物像と、母、乳母の女房、斎藤五・六、文覚たちの祈りと尽力によるところが大きいといえよう。

六代は菖蒲谷の隠れ家を時政に取り囲まれた際、

若君、母うへに申させたまひけるは、「つゐにのがまじう候へば、とくく出させおはしませ。武士どもうち入てさがすものならば、うたてげなる御ありさま共を、見えさせ給ひなんす。たとひまかり出候とも、しばし

も候はゞ、いとまこふてかへりまいり候はん。いたくな歎かせたまひ候そ」となぐさめ給ふこそいとおしけれ

と言つて、母を氣遣う。千本松原で斬られる場面でも、

卷十二「六代」(五〇頁)

今はの時になりしかば、若公御ぐしのかたにかゝりたりけるを、よにうつくしき御手をもて、前へ打越し給ひたりければ

卷十二「六代」(七七頁)

のように、常に静かに自らの宿命を受け入れる覚悟をしているのだが、周囲の人々との巡り合わせや、彼らの奔走によつて助命が叶つたのである。更に、『平家物語』における六代は、鎌倉方に対して謀反を企てる意志はなく、高野・熊野を巡礼するなど、一族の鎮魂を自らの役割であると自覚している人物として描かれている。六代説話において、誰も六代に対してすげなくすることができず、周囲の人々

は六代助命のために一所懸命に尽力するのである。これは偏に六代のいとおしさによるものであろう。また、この助命には観音の加護があったと六代説話は物語る。物語は六代が助かったことを観音の利生によるものであるという構造をとっているのである。

次に、六代説話と観音信仰について論ずる。六代説話は、中にも小松三位中将の子息、中御門の新大納言のむすめの腹にありときく。平家の嫡々なるうへ、年もおとなしiskanなり。いかにも尋いだして失ふべし

卷十二「六代」(六二頁)

のように、六代を鎌倉方から排斥される宿命にある人物として位置づけている。六代は、ある女房の密告によつて時政に発見され、捕らえられた。六代の母は六代の身を案ずるあまり、たゞいまちとうちまじろみたりつる夢に、此子が白い馬にのりて来つるが

卷十二「六代」(五五頁)

という夢をみる。この「白い馬」に関しては、『六代御前物語』で「シロキムマトミルハ(観音)ノリシヤウトコソキケ。クワムラムタスケタマエトテチフツタウニソナキイタル」と「白い馬」は観音の靈示であると明記されている。『平家物語』における六代説話でも、六代が後に助命されるという物語の展開を考慮すると、夢告という形で観音の意向を暗示していると考えられる。更に、千本松原で六代が処刑されそうになった際、斬り手に選ばれた狩野工藤三親俊は目がくらみ、気が遠くなり、六代を斬ることができなかったという場面が設けられている。『妙法蓮華經』の「観

世音菩薩普門品第二十五」やその他の經典の観音利生の中には、観音を信仰する者が斬られそうになった時、その刃の刃はこぼれるというものがあるので、この部分が観音信仰の影響を受けていることは明白である。

六代説話において、六代の母が斎藤五から六代の助命成功の知らせを聞いた場所を「長谷寺」としていることにも大きな意味がある。何故なら、語り継がれていく口承の伝承譚では、それが伝えられていく過程で固有名詞が薄れ消えてしまうことがあるのに、ここでは「長谷寺」と明記されているからである。つまり、岡田氏が指摘しているように、長谷寺という場が果たした役割は、六代助命に加えて母子再会までを観音の利生として描き出そうとすることにあり、百二十句本でその場所を「長樂寺(ちやうらくし)」としているのは長谷寺が果たしていた役割が意識されなくなった結果なのである。従つて、六代説話は長谷寺の十一面観音に対する信仰を語るといふ意図のもとに伝えられてきたと思われる。

その上、

観音の大慈悲は、つみあるもつみなきをもたすけ給へば、昔もかゝるためしおほしといへ共、ありがたかりし事共なり

卷十二「泊瀬六代」(八六頁)

と、六代が助命されたことを観音の御利益として語っている。また、『平家物語』には、

十二の歳より、卅にあまるまでたもちけるは、ひとへに長谷の観音の御利生とぞ聞えし

とあるように、六代が捕縛されたにもかかわらず三十余歳まで生き長らえることができたのは観音の慈悲のお陰である、と長谷寺の観音を高らかに称揚している。以上のように、物語における六代説話の構造をみてみると、観音信仰が丁寧に物語られていることが分かる。

富倉氏によると、『平家物語』巻十二に載っている一連の六代説話は「六代御前物語」にみられるように、現存する『平家物語』に先行して既に成立していたものであったと考えられている。そして、その「六代御前物語」は観音の利生譚としての特徴を色濃く残している。その後、『平家物語』に載録される際にも、同様に六代説話は観音の利生譚という要素を色濃く残したのである。『平家物語』の構想には平家一門の鎮魂と、物語の享受者たちを唱導するという意図があるので、六代説話が『平家物語』に組み込まれた際にも、観音の利生譚としての要素がそのまま取り入れられたのであろう。

このように、『平家物語』では滅亡した平家一門に対する鎮魂として六代助命の物語が語られている。更に、処刑される宿命にあった六代でさえ、観音の慈悲によって救われたと語り、『平家物語』の享受者たちを唱導しているのである。次章では『吾妻鏡』と比較することによって、『平家物語』における六代説話の構想を導く。

三、『平家物語』と『吾妻鏡』

本章で注目したいのは、六代の捕縛をはじめとする『吾妻鏡』の記事と『平家物語』の内容との差異である。『吾妻鏡』に記載されていないにもかかわらず『平家物語』で語られている話は、『平家物語』の作者・編者たちが物語として加筆し著述した部分である。従って、本章では『吾妻鏡』と『平家物語』とを比較し、物語にはたらいっている構想を導き出したい。以下に『吾妻鏡』に載っている六代に関する記事を簡略化して挙げる。尚、割り注は(〜)で括った。

文治元年(一一八五)十二月十七日

○於_二遍照寺奥、大覚寺北菖蒲沢、虜_三権亮三位中将惟盛卿嫡男(字六代)一。

○神護寺文学上人、称_レ有_二子弟之昵_一、申_二請北条殿_一云。

○須_レ啓_二子細於鎌倉_一。

○待_レ其左右之程、可_レ被_二宥置_一(云々)。

同年同月廿四日

○文学上人弟子(某)、為_二上人飛脚_一参申云。

○如_レ此少生者、縦雖_レ被_二赦置_一有_二何事故_一哉。

○就_レ中祖父内府於_二貴辺_一被_二尽_一芳心。

○且被_レ優_二文学_一、可_レ預_二給_一歎(云々)。

○(頼朝が言うには) 彼者為_二平將軍正統_一也。雖_二少年_一争無_二成人之期_一哉。尤難_レ測_二其心中_一。但上人申状又以非_レ可_二黙止_一。

○使者僧懇望及_二再三_一之間。

○暫可奉_レ預_二上人_一之旨、被_レ遣_二御書於北条殿_一（云々）。
建久五年（一一九四）四月廿一日

○故小松内府孫子（維盛卿男）六代禪師自_二京都_一參向。
所帶_二高雄上人文学書状_一也。偏依_二恩化_一、繼_レ命之間、
於_二関東_一、更不_レ存_二巨惡_一。矧亦於_二遂_一出家_二遁世_一哉之
由、属_二因幡前司広元_一申_レ之（云々）。

この他にも、六代が頼朝に対面し厚遇されるという建久五年（一一九四）五月十四日条の「六代禪師事有其沙汰、暫可_レ令_レ止_二住関東_一之由云々。是平治逆乱之時、故小松内府為_二源家被_レ施_二芳言_一訖。依_レ不_レ思食忘_一如此（云々）」や同年六月十五日条の「將軍家招_二六代禪師_一、対面給。無_二異心者。可_レ補_二一寺別当職_一之由被_レ仰（云々）」という記事もある。このように、「吾妻鏡」に記載されているにもかかわらず、「平家物語」には載録されていない内容もある。それは物語の作者・編者たちがその構想に基づいて推敲し、物語に必要であると思われる話題だけを取り入れた結果であるろう。

今度は先程とは逆に、「吾妻鏡」にみられない内容で、且つ、「平家物語」に載録されているものに留意したい。例えば、六代の乳母の女房が文覚上人を尋ねて高雄へ行き、嘆願したことや千本松原での処刑間際に文覚の使いが劇的に到着し、その直後に文覚が現れ、赦状を手にするまでの経緯を語ったことなどである。ここから導くことができるのは、「平家物語」が文覚を称揚し、文覚説話の一部としても

物語に組み込もうとしている姿勢である。例えば、右に挙げた「吾妻鏡」文治元年（一一八五）十二月二四日条において傍線を施したように、六代助命のために鎌倉へ下向したのは文覚の弟子であった。しかし、物語では文覚自身が下向し、頼朝をかき口説いて六代の助命を成立させたと言われている。これは六代説話が文覚を称揚する伝承者・伝承基盤との関わりが深かったためであるといえる。また、「平家物語」巻五において人並みはずれた荒行をこなし、王法仏法相依の関係を維持するために後白河院にたてつき、頼朝に謀反を唆した大胆不敵な文覚をここでも活躍させたという享受者の要望を反映したものの表れでもある。

また、「吾妻鏡」にはみられないが、「平家物語」には六代母子の情愛の物語が織りなされている。ここにこそ、「平家物語」の作者・編者たちの構想が如実に現れていると考えられる。これについては「六代御前物語」を考慮に入れて考察するとより明白になるので、次章では「六代御前物語」を考察の対象として論じたい。

四、六代母子の情愛物語

六代母子の情愛の要素は、「平家物語」における六代説話を形成するにあたり、多大な部分を占めている。これは「六代御前物語」よりも、「平家物語」において顕著である。

まず、六代の母について考察を加えたい。六代説話の伝搬者であるといわれている斎藤五・六が、時政に捕縛され

た六代のもとに付き従つて行つた後も、菖蒲谷の隠れ家に残つた六代の母、つまり維盛北の方たちの様子は詳細に物語られてゐる。このことから、六代説話生成の担い手として、斎藤五・六に加えて、維盛北の方を想定することができよう。つまり、維盛伝承の中の「維盛北の方物語」と同様、六代説話の伝搬についても維盛北の方が関与しているのである。第一章で述べたように、重盛の妻は大納言成親の妹であり、嫡子維盛の北の方は大納言成親の娘であるというように、小松家と大納言成親の身内は近い関係にあった。それ故に、六代を小松一族の嫡々であると位置づけて物語るこの話は、維盛伝承の中の「維盛北の方物語」を受けているといえる。「平家物語」における六代説話は維盛伝承を引き継いでおり、その生成には維盛北の方も携わっていたのである。

しかし、六代説話における維盛北の方、つまり六代の母の存在は単に物語の伝搬者としての問題だけに留まらないと思われる。ここには「平家物語」全体の構想において意図的なものがはたらいてゐるのではなからうか。つまり、六代の母は単に「平家物語」における六代説話の伝搬者として登場してゐるのではない。小松一族への鎮魂として、母子情愛の物語を形成するために、六代の母の存在は重要な意味を持つてゐるのである。次に、これらのことを踏まえた上で、六代母子の情愛の物語について論ずる。

第一章で詳述したように、消えゆく運命の小松一族のため、『平家物語』の作者・編者たちは何とか救ひ、或いは、

慰めを見出したいと考え、「平家物語」における六代説話に母子情愛の物語を組み込んだのであろう。つまり、『平家物語』の六代説話が母子の情愛溢れる物語を展開することによつて、重盛・維盛各々の母との巡り合わせの悪さと、それ故の非運に対する慰めとしたと考えられる。「六代御前物語」と比較してみると、『平家物語』にはそれがよく表れてゐるのである。例えば、母の嘆きについてみると、『六代御前物語』よりも『平家物語』諸本の方がより誇張され、詳細に、繰り返して語られてゐる。

また、斎藤五が長谷寺で多くの参籠者たちの中から六代の母たちを探し求める部分を読み解いていくと、延慶本では「女房」の声が、長門本においては「母上乳母の女房」の祈る声が契機となつて再会できたと言語されている。一方、『六代御前物語』では斎藤五が母たちを探し当てたきっかけを母や乳母の女房の声ではなく、「ヲサナキ人」つまり、妹君の「南無大悲観世音アノワカコムセムフタ、ヒワレニカエシミセタへ」という声によるとしているのである。高野本のように斎藤五が母たちを長谷寺で探し出すまでの話を記さずに、困難なく再会するという諸本もあるが、長谷寺で六代の無事を聞いた際、

母うへ、めのとの女房、つや／＼うつ、ともおぼえ給はず、
「是はされば夢かや夢か」とぞの給ひける。

卷十二「泊瀬六代」(八六頁)

のように母の喜びを語らない『平家物語』諸本はない。ところが『六代御前物語』では、長谷寺で六代の無事を知つ

た時の母の喜びは直接物語られていない。このことから『平家物語』における六代説話での母の存在意義は大きいといえよう。右に述べたように、長谷寺での齋藤五と母たちの再会を詳しく物語らない『平家物語』諸本もある。しかし、それは第二章で述べたように、長谷寺の意味が省みられなくなつたからであろう。

この他にも遡及してみると、『平家物語』における六代の母の存在の意味は、助命された六代が母たちに自分の姿を見せ、安心させようと大覚寺へ戻つて来た場面からも窺うことができる。具体的にいうと、この時、走り寄つて来た子犬に「母うへはいづくにましますぞ」(巻十二「泊瀬六代」と六代が母のことを尋ねる場面である。この場面に関する異同をまとめると次の表のようになる。

高野本		母うへはいづくにましますぞ
流布本		いかにもしてかひなき命をいかばやと思しも、恋しき人々を今一度見ばやとおもふため也。こはされば何となり給ひけるぞや
百二十句本 (斯道文庫本)		母上は何処にましますぞ 人目も恥ぢず、命の惜しう候も、母上を今一度みばやと思ふ為なり。今は生きても何にかはせん 人ハ焉チヘゾ

延慶本	母御前メノトノ女房妹ノ姫君イツクニゾ カイナキ命ノ惜カツルモ、帰リ上リタルウ レシサモ、コノ人々ヲ今一度見奉、見ヘ奉 ムガ為ニコソ有ツルニ、コハイツクヘソヤ
長門本	母御前、乳母の女房、妹の姫君はいづくにぞ命のをしかりつるも、かへり上りたかりつるも、此人々を今一度見奉り、見え奉らんとこそ思ひつるに、こはいづくへぞや
四部合戦状本	在是人何
源平盛衰記 (蓬左文庫本)	無甲斐命惜返上喜此人々今一度奉見思 人々はいづくへぞ
六代御前物語	いのち生てかへり上りたるかひには、この人々に見え奉りたらばこそうれしからめ
	×
	×

右に挙げた表のように、『六代御前物語』にこの場面は設けられていない。『平家物語』における六代説話の方が、六代の母たちへの想いを丁寧に物語っているのである。

これらのことから、『平家物語』における六代説話には観音生だけではなく、母子の情愛を具現化したという構想がはたらいっていると考えられる。『平家物語』では六代の人物像と観音信仰に加えて、六代母子の情愛が物語られて

いるのである。「六代御前物語」と『平家物語』における六代説話の違いは、『六代御前物語』では妹君が重要な鍵を握っていたのに対し、『平家物語』では六代説話が組み込まれる際に、母の存在の意味が大きくなっている点である。つまり、『平家物語』に六代説話を取り込まれる際、『平家物語』の作者・編者たちの構想のもとに、六代説話は六代母子の情愛の物語として取り込まれ、平家一門、その中でも特に小松一族への鎮魂の意味が与えられたといえる。

結

平家一門は壇ノ浦で滅亡したが、『平家物語』において六代の助命を語ることによって、処刑される宿命にあった六代ですら完全に見放されたのではないと物語る。従って、『平家物語』における六代説話の構想は滅びた平家に対する鎮魂と、享受者を唱導することであった。

また、『六代御前物語』における六代説話で強調されているものが観音信仰と、いと美しい人としての六代像であるならば、『平家物語』における六代説話で組み込まれたものは、小松一族への鎮魂としての母子の情愛の物語であるといえよう。重盛・維盛は母親との関係が複雑なものであったために、微妙な立場に追い込まれ、平家一門から離れて行かざるを得なかったといえる。消えゆく運命の小松一族のために、『平家物語』の作者・編者たちは、六代を小松一族最後の嫡々として位置づけ、『平家物語』全体の構想に組

み込んだのである。その構想とは、重盛・維盛説話では具現化することのなかった母子の情愛の物語を六代に集結させ、小松一族への鎮魂とすることであったと考えられる。『平家物語』における六代説話は小松一族への鎮魂を意味するものとして構想されていたのである。

今後、本稿では述べなかった、「遍照寺のおく大覚寺と山寺の北のかた、菖蒲谷と申所」(巻十二「六代」という場の意味についても考察を加える予定である。六代母子たちはここに隠棲し、それ故に六代捕縛後は齋藤兄弟が何處もここにやって来た。そして、ここは六代母子の再会の場所として設定されているので、六代説話における「長谷寺」と同様、大きな意味があったと考えられるからである。以上、六代説話の生成基盤・成立過程については、重盛・維盛・成親・齋藤兄弟の周辺に関連して、検討すべき点はたくさん残されているが、本稿では、母子の情愛の物語を論点にして『平家物語』における六代説話を読み解いてきた。

注

- (1) 岡田三津子「『六代御前物語』の形成」(『国語国文』第六十二巻第六号・一九九三年六月)、岡田氏「六代をめぐる説話」(水原一編『平家物語説話と語り』あなたを読む平家物語2)一九九四年一月・有精堂所収)
- (2) 長門本・流布本は長谷寺へ向かったのを齋藤五ではなく、齋藤六とする。

(3) 本文の引用は、以下のものを用いた。尚、適宜、新字体に改め、句読点・濁点・「」・傍線を付した。

高野本 市古貞次編『高野本平家物語』一九七三年十一月／一九七四年二／三月・笠間書院

流布本 高橋貞一校注『平家物語』一九七二年二／六月・講談社

百二十句本 慶應義塾大学付属研究所斯道文庫編

『斯道文庫古典叢刊之二 百二十句本平家物語』一九七〇年一月・汲古書院

延慶本 大東急記念文庫編『延慶本平家物語』一九八三年二月・汲古書院

長門本 国書刊行会編『平家物語 長門本』一九七四年十月・名著刊行会

四部合戦状本 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『四部合戦状本平家物語』一九六七年三月・大安

源平盛衰記 古典研究会編『古典研究会叢書第二期 (国文学) 源平盛衰記』一九七四年八月・汲古書院

六代御前物語 富倉徳次郎『平家物語研究』一九六四年十一月・角川書店所収

吾妻鏡 黑板勝美編『新訂増補国史大系吾妻鏡』一九六八年五月・吉川弘文館

尊卑分脈 黑板勝美編『新訂増補国史大系尊卑分脈』一九六四年七月・吉川弘文館

(4) 「唐皮といふ鏡」「小鳥といふ太刀」については富倉徳次郎『平家物語全注釈』下一 (一九六七年十二月・角川書店) の三三四頁の語釈に触れられている。

(5) 千葉知樹「六代説話論―六代像への考察を中心に―」(『軍記と語り物』第三十三号・一九九七年三月) では、十二才という年齢と六代の美しさから六代像を導き出している。

(6) 「吾妻鏡」建久五年(一一九四)六月十五日条にある「將軍家招_レ六代禪師_一、対面給。無_レ異心_一者。可_レ補_二一寺別当職_一之由被_レ仰(云々)」という記事から推察することができるよう、六代は鎌倉方に謀反を企てる意志はなかったようであるが、『源平盛衰記』巻第四十七には「若_レ公は_レおさなき心に、一門のほろびける、この上人の所為_ニにや、うらめしやと覚しけれども、今わが身にあたりては、うれしくたのもしく」という独自文が見受けられる。

(7) 白馬と観音の救済との関係については、櫻井陽子「観音の御変化は白馬に現せさせ給とかや」(水原一編『延慶本平家物語考証一』一九九二年五月・新典社所収) に詳述されている。

(8) 鳥津忠夫「鎌倉殿に受領神付き給はずは―六代御前物語」と『平家物語』―(『国語国文』第五十九巻第八号・一九九〇年八月) には、「この白い馬の夢の話は覚一本と延慶本とで位置が異なる。『六代御前物語』と延慶本とが同じ位置で、(中略) 時政が二十日

の日延べの後、文覚上人から何の連絡もないので、六代を連れて関東へ下向しようとする直前のこととなっている。この方が、観音の靈示としては相応しいので、これが原型であつたろうと思われ、(後略)」という指摘がなされている。

(9) 前掲注(1)に同じ。

(10) 前掲注(1)の岡田氏「六代をめぐる説話」

(11) 富倉徳次郎「附・平家物語の成長過程を推定させる資料の考察」『六代御前物語』考(富倉徳次郎「平家物語研究」一九六四年十一月・角川書店所収)

(12) 前掲注(1)の岡田氏「六代御前物語」の形成」では、特に六代の妹である夜叉御前の果たす役割が大きいと指摘されている。

(13) 武久堅「失われた人を求めて―維盛伝承と平家物語の構想」(武久堅『平家物語の全体像』一九九六年八月・和泉書院所収)

(14) この部分の異同を示すと以下の表のようになる。「六代御前物語」では妹が、「平家物語」では延慶本や長門本のように母と乳母の女房の存在が大きな役割を担っている。

高野本	× (困難なく再会)
流布本	× (困難なく再会)
百二十句本 (斯道文庫本)	× (困難なく再会)

延慶本	女房声ニテ観音経ヲ誦テ、別ニシ人ニ此世ニテ今一度合給ヘト、泣々申ヲ聞バ、乳母ノ女房ノ音也
長門本	母上乳母の女房は、長谷の観音堂の正面に候ひ給ひて、別れし若君今一度今生にて合せ給へ、それかなはず候はゞ、急ぎ命を召して、若君と一蓮の上に向へ給へ、大慈大悲の御誓は、枯れたる草木も花咲き実なるとこそ承はれ、悲願あやまたず合せ給へと申もはて給はず、御涙にむせびて、法施の音も弱りにける
四部合戦状本	× (困難なく再会)
源平盛衰記 (蓬左文庫本)	× (困難なく再会)
六代御前物語	ヲサナキ人ノコエニテ南無大悲大悲観世音アニノワカコムセムフタ、ヒワレニカエシミセタヘトテ。チキサキス、ラスリケレハ

(15) このことは前掲注(1) 岡田氏「六代をめぐる説話」にも触れられている。

(おくだしらずよ／本学大学院博士課程)